もし異界に行ったなら

道長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もし異界に行ったなら

【Ｎコード】
Ｎ９２３０Ｊ

【作者名】
道長

【あらすじ】
もし異世界に行ったら……というのコンセプトに異世界での生活をのんびりほのぼのテンション高めに書いていきます。
戦争とかがあったり、悪の魔王を倒したりはしませんのでそういうのが好きな人にはつまらない内容になってます。

あ、あとご都合主義です。

第一話（前書き）

この小説は作者の初投稿作品ですので多分下手な文章になってます。
それでも構わないというかたはぜひ読んでやってください。

第一話

第1話

あっ、ども。はじめまして。

祖父江（そぶえ）　優樹（ゆうき）です。

えーっと……とりあえず自己紹介しとくと高2の男子　趣味と特技は料理　身長が172で体重63の標準体型。あだ名は優じぃ。

どこにでもいそうな顔ってよく言われます。

まぁこんな感じで普通の高校生……だと思う。

いや、昨日までは普通の高校生って断言できたんだけどね～。

なんか朝、目が覚めたら見知らぬ土地にいました。

草原って感じかな？膝下まで伸びた草がいっぱいだよ。

んで、おまけに目の前にはなんかド〇クエにでてくるゴーレムみた

いのが一体。

この状況　何？

ていうかゴーレムっぽいのデカイなぁ。俺の頭が足の付け根くらいまでしかないよ。

動かないのはあれだよね。なんか仮面〇イダーとかで敵キャラが変身を待っちゃうあれで俺の考えがまとまるのを待ってくれてるんだよね。

なんかもうあれだよね。この状況が訳わからなさ過ぎて頭ん中くるくるぱーになってるよね　俺。

しかも自分で思ったけどさっきからあれあれってくどいよね。もう５回もあれって言ってるし。

あ、６回になった。

……まぁどうでもいいや。

だってさ、今日も普通に起きて普通に学校行く予定だったんだよ。

それなのに何ですか？この状況。

異世界トリップじゃないんだからさ。

……異世界トリップ？

……まぁそんなのあるわけないか。

きっと拉致られてどっか自然が豊かな田舎に置き去りにされただけさ！

そうだよ！このゴーレムもどきも石像かなんかなんだよ！

……うん。そんなわけないよね。

わざわざ拉致って置き去りとか訳わからんし。

ゴーレムもどきは目が光ってるし。

まだ異世界トリップのほうが信じれるっつーの。

「……ニんゲン」

「うひゃい！」

何！？……何今の！？思わず変な声出しちゃったよ！

「……ニんゲン……ナぜ…ここニ……イル？」

……やっぱり？

うん。ゴーレムさんがしゃべってました。

「……なぜなんでしょう？なんかいつの間にかここにいました」

普通に返しちゃったけど言葉わかるんだね。ゴーレムって。

「……ナゼ……ダと？……オマえは…トつゼン……アラわレタ……」

「あ、そうなんですか？」

「……まほウを…ツカッタのデハ……ナイノか？」

……魔法？ル〇ラみたいなもんでもあんのか？

「……えーっと……とりあえず魔法？は使ってないです。んで気づいたらここにいたんですけど……ここってどこですか？」

「……ココは…マオうさマの……ニわ……」

「へぇ～……。魔王様の庭ですかー」

……あえてツッコみません。

もしかしてマ・オウさんかもしれないしね。

「……ニんゲンは……まほウ……ツカえナイ……ハず…ケど……コのニんゲンは……トつゼンアラわレタ……」

んー……なんか考え事中？

ていうか魔王様って本物？本物だったら軽くピンチじゃね？

……ていうかここってホントに異世界？

魔王様とか言ってるし、ゴーレムだし、魔法とか言ってるしなぁ。

夢オチだったらいいなぁ。

けど人生そんな上手くいかないよなぁ。

っと、ゴーレムさんの考え事が終わったっぽい。

「……ニんゲン……オマえヲ…マオうさマの……トこロにツレテいク……」

「……なんで？」

待て。なんでそうなった？

「……オマえ…トつゼンアラわレタ……ケど……ニんゲンハ……まほウツカエナイ……」

気づいたらここにいたからよくわからんけどそうみたいだね。

「……オれ…カンがえタ……ケど……バかダから……ワからない……ダから…マオうさマに……キく…」

あ、なるほど。魔王なんだからゴーレムよりは頭いいわな。

「……えっと…その魔王様？に会わないといけないんですか？」

「……アワなクてモ……イい」

あれ？意外な返事。

「……ケど……コのニワ…ヒロいから……キっと……マよッテ……デレなクナる」

あ、なるほどね。確かに建物どころか木の一本も見当たらないし。

「……のレ」

……手の平出して来たけど乗ればいいのか？

「……キがイハ…クワえナイ」

表情読まれた。

……まぁとりあえず乗ってみればいっか。

「じゃ、お願いします」

「……ワかッタ」

「うおっ！と……」

びっくりびっくり。ちょっと落ちそうになっちった。

けっこう高いなー。

うん。いい景色だ。

第二話（前書き）

どうも、道長です。

一話目に関わらずお気に入り登録して下さるお方がいました！感謝です。

第二話

第二話

前回までのあらすじ

魔王様の庭にトリップしました。

「……ついタ……」

「……」

「……ついタゾ」

「……スー…スー」

「…ネテ……イるのカ？」

「……スー」

「……タシカに……モうヨアけダからナ……シかた……ナイ」

「……ぅん？」

……。

……。

……ここどこだ？

なにこの無駄にでかいベッド。無駄に広い部屋。まったく見覚えないし。しかも俺ん家ベッドなんて無いし。

あー、こういうときは過去を振り返ってみるといい気がするな。なんとなく。

えーっと昨日は……そうそう、朝起きたら見知らぬ土地にいたんだった。

あ、俺2日連続で朝起きたら見知らぬ場所にいるよ。

……そんなときもあーるさ♪

はい。じゃあ次行ってみよー。

ゴーレムさん（仮）に話かけられて、魔王様の庭とか言われて、肩に乗っけてもらって、んで夜になっても着かないから眠くなってきて……。

そのまま寝ちゃいました。

だってさ、ゴーレムさんてすごいいい人……人じゃないけどすごい優しいんだよ。

歩く時とかぜんぜん揺れないようにしてくれてたし、尻が痛くなったとき見計らってときどき降ろしてくれたし。

うん。いいゴーレムさんだった。

で、ここどこだろ？

昨日の展開的に魔王の城っぽいけど魔王がわざわざベッドなんて用意してくれるもんかねぇ？

……かんがえちゅう。……かんがえちゅう。……わかんね。

あ、飯置いてある。

食べていいの？これ。

……ダメだったら置かないよね？

じゃ、そういうわけで。

「いっただっきまーす！」

お、このパン少し冷めてるけどけっこう美味い。

野菜サラダは……野菜が甘いね。少し乾いてなきゃもっと美味しかったと思うけど。

コーンスープはヤバイくらい濃厚。なのにくどくない。けどやっぱ

りぬるい。

「うん。満足　満足」

おいしかったよ。次はできたてで食べたいです。

……暇だなぁ。

なんもやることないっす。
部屋ん中いろいろ探ってみたけどなんもなかったし。外出たいけど迷子になんのヤだし。かといってベッドでゴロゴロしててもアレだしなぁ。

……ヒマヒマヒマヒマヒマヒマヒマ　ヒマ　ヒマ　ヒマ　ヒマ　ヒマ　ヒーマ　ヒーマ　ヒーマ　ヒーマ　ヒーマ　ヒーマ　ヒこんこんッ「うほおォい！」

ビックした！　マジビックした！！ビビりすぎてビックリのリ抜けちゃったよ！

「……入ってもいいですか？」

あ、ノックされたの忘れてた。とりあえずベッドから降りないと。

「よいしょっと……どうぞ～」

「失礼しますね」

ガチャッとドアを開けて入って来たのは女の子だった。

しかもめっさかわいい。

肩のちょい下あたりまで伸ばした黒髪がすんげー綺麗。顔は……ご想像にお任せします。とりあえずかわいいんです。僕の乏しい表現力では表せないくらいかわいいんです。

「あの……私の顔になにか付いてますか？」

む、しもーた。思わずぎょーししちまったよ。

よし！こんなときは！脳内シュミレーション、はつ　どう！

「あ、あんまりかわいかったんで見つめちゃいました」

「ふふふっ。おだててもなにもでませんよ」

「いやいや、おだててなんかませんよ。はっはっはー」

よし。これだ！

そうと決まれば早速実行！

「いえ。あんまりかわいかったんで思わず見つめちゃいました」

「えっ……？」

……あれ？シュミレーションとちゃうやん。

「その……あの……困り……ます」

ぐふわっ！

うぅ……。顔赤くしてそんなん言うなんてヒキョーだよ……。

しかもなんか気まずくなっちゃったし。

うわぁ。めっちゃ顔真っ赤だよ。いや、かわいいからいいんだけどね。

うーん……。

どないしようこの状況？

第三話（前書き）

お久しぶりです。

そして言い訳をさせてください。

僕は携帯（なぜかパソコンで投稿になってます）で投稿しているのですが……携帯が水没しました。

昨日やっと修理から返って来たんです。

お気に入り登録していただいた方や感想をくださった方には非常に申し訳ないです。

こんなドジな作者をこれからもよろしくお願いします。

第三話

第三話

前回までのあらすじ

超気まずい。

そろそろ5分くらいたったかな？

無言です。

二人とも無言です。

果てしなく無言です。

こういうの苦手なんだけどなー。

さらに5分ほど経過。

ようやく顔の赤みが引き、黒髪少女は少し落ち着いたもよう。

あ、目合った。

また顔真っ赤になった。

うつむいた。

こっちちらちら見ながら指モジモジさせてる。

……なんつーか、萌え？

思いっきりハグしたいくらいかわいいデス。

更に3分。

さっきの少し落ち着く→目が合う→うつむく→落ち着く……をもう二回ほど繰り返しました。

普通に話しかけたほうがいいと思えてきた今日このごろ。

……うん。普通に話しかけよ。

「……あの～」

「ひゃい！にゃんでしょうか！？」

噛んだ。

二回噛んだ。

思いっきり噛んだ。

かわいいからいいんだけどねー。

「……とりあえず落ち着きましょう。深呼吸すれば落ち着くと思いますよ」

「……ありがとうございます。…スー…ハー…」

俺は深呼吸を始めた黒髪少女を見ていてふと気付いた。

意外とデカイ。

……しょうがないよね。深呼吸って自然とそこを強調しちゃう

し。

視界に入れたわけじゃないんだよ、入って来ちゃったんだよ。

……がんばって言い訳したけどね。俺も健全な男子高校生ですからね。

ＧＡＮＭＩしてます。

無理です。視線外せません。

……やめて！そんな目で見ないで！！

俺だって、俺だって男の子なんだよーーーーーーーー！！！！！

「……さっきは恥ずかしい姿を見せてしまいました」

「あ、大丈夫ですよ。かわ……なんでもないです」
危ない危ない。思わずかわいかったですしねって言いそうになっちった。またさっきのやりとり繰り返すとこだったよ。
「……？…私の名前はミレットと言います。名前を聞かせてもらってもいいですか？」
「あ、はい。祖父江　優樹です」
「ソブエさん……ですか？」
んー……なんか困ってるっぽい？

……あ、そういうことか。
「優樹が名前ですよ。祖父江は名字です」
「ミョウジ……？」
あり？そういうことじゃないの？
「……ミョウジとはなんでしょうか？」
わーお。そう来ちゃう？

名字がない……んで日本語ペラペラの地域とか聞いたことないしなぁ。

やっぱ異世界トリップか。

てゆーか名字がない、なんて考えたことなかったな。

確かに異世界に名字があるなんて限らないし、名字があるっていうのは向こうの固定概念か。

……なるほどね～。勉強になりましたわ。

あ、じゃあ他にも向こうと違うことってあるんかな？

……やべ。ちょっと楽しくなってきた。

こりゃ向こうじゃ味わえん感覚だね。

「……どうかしたんですか？」

「あ、すいません。ちょっと考えごとしてたもので」

いけね、ミレットさんのこと忘れてた。

えーっと……たしか名字って何？って聞かれたんだよな。

名字……ねぇ。

「さっきの話に戻しますね。えっと、名字っていうのはなんというか……家の名前みたいなもの…かなぁ。あ、住むほうの家じゃないんですけど」

うーん……、説明しづらい。

なんて言えばいいのかなー。

「代々その家系で名乗るものなんですけど……名前とはまた別のものというかなんというか……説明が難しいです」

「……家名のようなものですか？」

「そうそう！そんな感じです」

「……やっぱりですね」

「……？何がですか？」

「あなたは、この世界の人間ではありませんよね？」

第三話（後書き）

というわけで第三話でした。

僕はだいたい二千字以内で一話が終わるんですけど……短いですかね？

あ、あと基本的には主人公視点で書いていきます。文才がないんでそうじゃないと書けないんです。

それでは次のお話しまでさようなら。

第四話（前書き）

道長です。

受験が終わりました。

今日から一気に投稿します。

目指せ！毎日投稿！！

第四話

第四話

前回までのあらすじ

ミレットさんのあれは意外と大きかった。

「…やっぱそうゆうのってわかっちゃいますか？」

「……否定、しないんですか？」

「しませんよ」

だってしても意味無いし。

あれ？なんかミレットさんがぽかーんとしてらっしゃる。

「どうしたんですか？」

「いえ……もっと隠すんじゃないか、と思っていたんですが……」

「隠しませんよ。だって赤の他人である俺にわざわざ寝床と飯を用意してくれたんですから」

ホント、ありがたかったよ。ベッドふかふかだったし飯うまかったし。

「恩を仇で返すつもりは、ありません」

あ、この意味通じるかな？

「……なるほど、ですね」

お、通じたっぽい？

恩仇は通じるんだな、と思っていたら「面白い方ですね。あなたは」と笑顔で言われた。

俺……なんか笑えること言ったっけ？

「――――――つまり目が覚めたら私の庭のなかだった、と」

「まぁそんな感じっす」

あの後ここに至るまでの経緯を簡単に説明した。

……あれ？

今なんか変じゃなかったか？

ちょっとリプレイお願いします。

「――――つまり目が覚めたら私の庭の中だっ『ストップ』

もう一回巻き戻してみようか。

「――――つまり目が覚めたら私の庭の中『ストップ』

……よし。脳内メモリーを整理してみよう。

昨日俺はわけ解らん草原で目を覚ましました。

ゴーレムさんに魔王様のところに連れてってもらいました。そのときゴーレムさんはここは魔王様の庭と言っていました。

そして今ミレットさんは私の庭、と言いますた。

……魔自出？まじで？マジデ？

なんとなく三パターンで言ってみました。

まぁそれは置いといて魔王様って……目の前の御方？

女性ですよ？

美人ですよ？

華奢ですよ？まぁ出てるとこは出……ゲフンゲフン。

俺はドラ〇エの魔王みたいなのを想像してたんですが……。

そんなの出てきても困るけど。

おっと、話それちった。

まぁまず聞いてみないとわからないよね。

「ミレットさん」

「はい。なんですか？」

……聞きづらい。こんな丁寧な話かたする魔王なんて聞いたことないヨ。

「魔王様に合わせてもらってもいいですか？」

「もう合ってますよ？」

はい、確定。

「……もしかしてミレットさんが魔王様だったりする感じですか？」

「私が魔王だったりする感じですね」

祖父江　優樹１７才

リアル魔王様に会いました。

第四話（後書き）

短いです。

明日には投稿します。

もしかしたら今日の内に投稿するかも。

第五話（前書き）

……早くもスランプ気味。

自分が何を書きたいかわからなくなってきました。

第五話

第五話

前回までのあらすじ

リアル魔王様は女性でした。

「……マジでミレットさんが魔王様なんですか？」

「まじ……というのはよくわかりませんが私が魔王であることは確かです」

マジは通じないのね……ってそんな場合じゃないよ！魔王様だよ！普通に『ミレットさん』とか呼んでたよ！！

これ殺られちゃうよね！多分殺られちゃうよね！！

ああ……まさか魔王に殺されるなんて思ってなかった。

死ぬ時は家族に看取られながら死ぬって決めてたのに……。

それも１７で死ぬなんてなぁ……せめて彼女のひとりくらいほしかっ「魔王……とは言っても今は名前だけですけどね」た？

……？

「どうゆうことですか？」

「……説明すると少し長くなるのですが———」

数世代前の話です。

この世界には戦争がありました。

それは人間と魔物の何百年にも続く戦い。

人間、魔物、ともに世代を越えて続く戦いでした。

互いに互いを滅ぼし合う。

たくさんの血が流れ、たくさんの命が散り、たくさんの憎しみが生まれた戦いもやがては互いに疲労が見えてきました。

それでも止まらぬ戦い。

どちらかが滅びを迎えるまで続くと誰もが思い始めたそのとき。

魔物の中から人間と魔物の共存を唱えた者がいたのです。

それが第２７代目魔王の一人娘　ミレットでした。

ミレットの唱えた共存はじわじわと広まっていきやがては約半数の魔物の支持を集めるまでになったのです。

これを好機と取ったミレットは人間にも共存を唱えていきました。

最初は戸惑った人間でしたがすぐに支持者は増え、こちらも半数を越えるまでになったのです。

こうして共存を唱えるものたちの手によって世界は平和になる……はずでした。

人間、魔物の両方の中に異常なまでに反対を示す過激派がいたのです。

彼らの主張は「今さら引き返せない」　の一点張り。

平和を望む穏健派と更なる戦いを望む過激派。

その両者によってまた血が流れようとしたそのとき。

ミレットが動いたのです。

魔王の家系であった彼女の力は凄まじく、歴代の魔王の家系のなかでも特に強力でした。

その彼女が行なったこと……それは世界を、大地を二つに分けたのです。

その後穏健派を東の大地へ、過激派を西の大地へ移動させました。

「――――こうして穏健派は平和を手に入れ、西の大地には平和が訪れました」

「そして、力を使い果たしたミレットは生きているのが不思議なほどなまで衰弱。ですが彼女は生きていました。……人間との間の子を産むまでは……」

「これはこの世界の成り立ちを示した童話です」

「そしてミレットは私の先祖。力のほとんどを失った彼女の子孫ですから私にもほとんど力はありませんし、特にやることもありません」

「……だから名前だけの魔王、というわけですか」

「はい。普段は何もせずにただ毎日を過ごすだけですしね」

……これはもしかするともしかしちゃうかも。

「ひとつ聞いてもいいですか？」

「はい。構いませんよ」

この質問の返事が期待どうりの返事なら……。

「ミレットのさんの力ってどんくらいですか？」

「そうですね……成人した人間の女性とそう変わらないと思います」

……きき、き、来たーーーーーーーーーーーーー！

これって、これって死なずにすむパターンだよね？そうだよね！？

……よかったぁ。

「……なぜそんなことを聞くんですか？それになんだか喜んでるみたいですし」

「いえいえ！なんでもありませんよ！」

うっかりうっかり、顔に出てたみたい。

……少し落ち着いたほうがいいよね。

……あー！もう！やっぱテンションあがる！！

生きてるって素晴らすぃ！！

第五話（後書き）

次の投稿は未定です。

……話がすすまねぇ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9230j/

もし異界に行ったなら

2010年10月12日01時24分発行